OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本寫眞美術展覧會における「寫眞工藝」：近代日本における写真，産業，商業の結びつきの萌芽をめぐって
Author(s)	芦髙，郁子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本寫眞美術展覧會における「寫眞工藝」

近代日本における写真，産業，商業の結びつきの萌芽をめぐって

芦髙　郁子　京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

日本寫眞美術展覧會は，1926 年に発足した公募制の展覧会である。第 1 回の日本寫眞美術展覧會は，「第一部藝術寫眞」と「第二部寫眞工藝」に部門分けされている（※以下，展覧会および部門名は新字体で表記する）。この展覧会については，すでに中島徳博氏によって展覧会の概要が明らかにされているほか，打林俊氏が，本展と同時期に開催された日本写真大サロンを比較しながら，審査制度とピクトリアリズムの表現の変化について論じている。しかし，それらの先行研究は，おもに第一部芸術写真について述べられたものであり，第二部写真工芸についての詳細な分析は不十分であると言える。1926 年から 30 年まで計 5 回開催された展覧会では，淵上白陽が編纂した『日本写真美術年鑑第一年版』と，フォトタイム社から出版された『日本写真美術年鑑昭和三年度』，『日本写真美術年鑑昭和四年度』，『日本写真美術年鑑昭和五年度』の計 4 冊が年鑑として刊行され，そこには，公募展覧会の概要や受賞作品や審査員の評論が掲載されている。本考察は，この年鑑を手がかりに，1920 年代後半に「写真工芸」という語のもとに展開した活動に焦点を当てたものである。

日本写真美術展覧会開催概要

1926 年 1 月 3 日付の『大阪毎日新聞』の一面に，中央六段の打ち抜きで日本写真美術展覧会の開催予告広告が出された。この広告からもわかるように，日本写真美術展覧会は公募展であり，審査および展覧会を開催することが目的だった。この開催予告広告の中では，第二部については「工芸写真」と記載されていたが，その後，「写真工芸」と名称が変更されている。またこの広告では，第二部の欄に「学術，記録，其他一般，特殊写真」と記載されており，第二部写真工芸が，実用的な写真や，芸術写真には数え入れることのできない種々の写真を射程に入れていたことも窺える。

第 1 回日本写真美術展覧会は，大阪の大丸百貨店（大丸呉服店）と東京上野の日本美術協會で催され，当時の写真展としては異例である入場料を徴したが，特に大阪においては 15 日間で 2 万人以上の入場者数を記録し，予想以上に盛況であったという。第一部芸術写真部門の最高賞には文部大臣賞が，第二部写真工芸部門の最高賞には商工大臣賞が設けられたほか，本社賞や，推薦や特選が選出されていた。展覧会には，受賞作品と入選作品が出品された。

掲載作品からみる写真工芸

年鑑に掲載された第二部写真工芸の作品としては，『日本写真美術年鑑第一年版』に掲載された参考作品が 7 点と，フォトタイム社から出版された 3 冊のなかに，実際の受賞作品 15 点を確認することができる。これら 22 点は，1）陶磁器や漆器などの器物に写真を転写したものや織物の図柄に写真を応用したもの，2）着色写真や，現在のカラー写真に繋がる天然色写真，3）グラヴィアやポスターなどの印刷物に大別できる。

この時代，横浜写真に代表されるように，写真はすでに外国に向けた輸出品の一つとして重用さ

れていた。横浜では螺鈿細工の蒔絵を表紙にした蒔絵アルバムのほかに，絹団扇写真，鈴木真一の陶器写真や，写真を金蒔絵に焼き付けた水野半兵衛の金蒔絵写真などが制作されていた。

日本写真美術展覧会の写真工芸の作品は，伝統的な工芸への写真の応用や，色彩写真や写真印刷の技術の洗練と振興を念頭においていたと思われる。このことは，写真工芸の部門において，必ず，その技法がキャプションに記されていることからも裏付けられるだろう。

年鑑に作品の掲載はないが，第 1 回から第 4 回までの展覧会では，第二部写真工芸のなかに活動写真が含められている。映画の前身ともいえる活動写真は，第 5 回展覧会で写真工芸部門からは分離され，新たに第三部として独立することになる。そうだとしてもなお，写真工芸という用語のもとに，極めて広い範囲の写真が扱われていたことにかわりはないだろう。

第 5 回展覧会では，さらに新たに，第四部として商業写真の部門が創設される。年鑑に掲載された商業写真の作例には，ほかの部門よりもモダニズム的で実験的な傾向をみてとることができ，イメージの表現性が志向されていることが伺える。

写真工芸の設立意図と制度的変遷

日本写真美術展覧会の第二部写真工芸部門の設立を任された鈴木陽は，審査員の人選において化学や印刷技術を重視していた。鈴木は，『日本写真美術年鑑第一年版』に掲載された「第二部を通して」という記事で，「私は芸術的に価値あるものを工業的に而も同一物を多数に製作し得るものを工藝品と云ひ，写真を利用したものを寫眞工藝品と云ひたい」と述べる。この区別を反映するかたちで，第 2 回展覧会以降は，第二部写真工芸部門から，第二門広告写真と第三門商品写真が除外されている。鈴木は，『日本写真美術年鑑昭和三年度』の掲載記事「本年の寫眞工藝を見る」で，ポスター用や商品宣伝用といった写真そのものは，写真工芸という区分に含まれないという自身の考えをさらに強調している。その一方で鈴木は，商品写真，コマーシャルフォトグラフィーとしての写真を，写真工芸品ではないとしながらも，写真工芸と同等のものとし，さらには，芸術写真とも同等のものとみなし重視している。この鈴木の考えは，第 5 回展覧会において，第四部商業写真の新設というかたちで具現化されることとなる。

第 5 回展覧会が開催された 1930 年は，ちょうど新興写真が登場した時期である。新興写真は，写真の機械性に基づく写真独自の表現を追求するとともに，広告や報道といった写真の実用性を重要視していた。そのような流れの中で，展覧会では新たに第四部商業写真が設立されることとなった。商業写真の審査員には，もともと第一部芸術写真の審査員を務めていた福原信三が審査員に加わった。福原は，資生堂の創業者でもあり，近代日本において大きな社会的影響力をもった芸術写真家であった。このことからも，商業写真に求められていたのは，商品を提示するという実用的な役割だけでなく，新しく実験的なイメージの芸術性や表現性であったことは明らかだろう。

おわりに

日本写真美術展覧会の第二部写真工芸は，当初は，芸術写真には数え入れることのできない種々の写真という広い範囲を網羅するものであった。だが，5 回の開催をとおして，写真工芸の定義は徐々に明確化されていき，その定義から外された商品写真や広告写真が，新興写真の興隆と共鳴しながら第四部商業写真として独立する。このことは，1926 年から 30 年の間に，商品をいかに魅力的にイメージ化するのかという，イメージ戦略における写真の実用性が，商業の中で自覚されはじめたことの現れだとみなせる。日本写真美術展覧会における「写真工芸」をめぐる動向は，写真の実用性を拡張するという点で，1930 年代以後の写真界を予見する重要な事象であったと言える。